安原貞室著「かたこと」をよむ（下）

――擬音語、俚諺について――

白木　進

目　次

一、「かたこと」の擬音語
二、「かたこと」の俚諺

備考「かたこと」は全五巻、八〇〇条よりなる。この文中、引用文に附した条目数字は、笠間選書⑱「かたこと」に附した番号による。

一、「かたこと」の擬音語

日本で擬音語を意識して集団的にとりあげ、かつ解説までこころみたのは、「かたこと」（1650）が始であろう。之より先、日葡辞書（1603）が約二百の擬音語を語彙として収録し、説明をくわえているが、それは「かたこと」の著者の関知する所ではなかった。

「かたこと」の著者はことばに注目した人であった。中でも音声に注目した人であった。当然いわゆる擬音語にもつよい関心をもちその巻五の雑詞部において特に擬音語の収集と解説をこころみた。そのしめくゝりの条に、

740一かんごりは。かごやかにおくまりたるかた歟
右五六十のこと葉は大かた音響をもて。頓而唱ふる歟。……かやうのこと葉是に限るにはあらず。大概斗なり。餘はなぞらへてはかりしるべし

といっている。

イ、日本語における擬音語略史

日本語は擬音語の豊富な言語といわれる。擬音語という言葉は、近代にいう onomatopoeia の訳語として生じたものであろうが、擬音語そのものは既に古代から使用され、かつ多少の認識もあった。例をあげると、

○記上 許々袁々呂々邇六字以音 とあり。原註の「音」とは字音であり、コヲロコヲロという日本語の擬音語を万葉仮名で表記したもの。

○万葉十二―2991 馬声蜂音石花蜘蛛は戯訓として有名な例。「当時の人々は、蜂の飛ぶ音をブと聞いたと共に、馬の鳴声をイの音で表はしてゐたのである。」（橋本進吉著作集4―駒のいななき）

万葉集にみる擬音語はうらうらに（4892）、しくしく降る（1440）など十数語でおおくはないが、その中には既に、

つらつら椿つらつらに（54.56）のように、後世におおくみられる同音反復表現があり、又

鴉とふ……君を許呂久（児ろ来）とぞ鳴く（3521）

来許武（来む）狐に浴むさむ（3824）

は、前者は鴉の声、後者は狐の声を表現すると共に、「来る」の意を重複させた用法がみえる。

なお、擬音語につく助詞は、記や風土記では「に」であるが、万葉集では「と」がつく例がふえ、平安朝以降は「に」が姿をけして「と」がとってかわる。

擬音語は元来口頭語にもちいるもので、定着した文語、特に韻文にはすくないようだ。

○源氏　八月十五夜……暁近くなりにけるなるべし。隣の家のあやしき賤の男の声々……ごほ〳〵と鳴る神よりもおどろ〳〵しくふみ轟かす確（カラウス）の音も枕上と覚ゆる、……白妙の衣うつ砧（キヌタ）の音も、……空飛ぶ雁の声……虫の声々みだりがはしく、壁の中の蟋蟀だに……鳴き乱るゝを（夕顔）

は、村山リウ氏が「音の文学」と称する章だが、文中に擬音語そのものはおおくはない。

鎌倉・室町にいたり、かたり物としての戦記文学にはようやく擬音語が多用され、強いP音的表現も続出する。くわえてあたらしい口語の発生と普及にともない、愚管抄や抄物などは民衆にわかりやすく通俗語でかかれ、擬音語もさかんに使用されている。狂言でも擬音語の多用が目だち、演者が、擬音語をみずから口述し、かつ演技にうつして、簡素な舞台をいかしている。その例、

ヒッカリヒッカリ〔稲妻〕グヮラリ　グヮラリ〔雷鳴〕……と言いながら退場（狂言「神鳴」の最後の場面）

ロ、貞室の擬音語観

貞室は「……の声」、「……の音」、がやがてこと葉になったと解する。すなわち

A、音声から（擬声語）

739　一　ひちよ〳〵は。小鳥の飛啼の声歟

550　一　泥亀（どうがめ）を。すっぽん。すぽんなどゝいふは……此亀のなくこゑの。すぽんといふによって。頓（やが）て名になれるか…

13　……梟（ふくろう）のから声をば。のりすれとなくといひならはせり。

などは生物の鳴声をとりあげた例。

51　……又ひったりといふは。引板（ひた）ひく音成べし。

658　……ひるとは。子をうむ時に鳴侍る音にや。

その他にも　662　665　667　687　690　693　694　695　696　697　701　702　715　722　723　724　725　726　729　731　733　734　735　736　738　740などは、音がやがてこと葉となったとみる条々。

B、かたち、状態から（擬態語）

667　……ひら〳〵とは。縦へばうすき物のちりて光るかたちにや。

のように、かたち（貌、貌、かた）と表現する条々がある。この場合は、目でみる形、状態を主とする。667　685　688　691　692　695　698　699　700　706　707　710　711　713　714　717　719　727　728　730などがこの種に属する。その外、

……さま　667　713　718

……心　704　705　708　709　712　716　720

……事　703 707 708

があるが、之らは「……かたち」というにちかい。又

695一　がったりは。もろくたふれたる貞（かたち）敷。

といい、ついで

又物にあたりてかたきをと敷

と、「かたち」「音」両面の解を呈しているものもある。（見方、受止方の相違。）

貞室が擬音語をとりあげて、「……音・声」「……かたち」と大別しているのは、今いう擬声語、擬態語の分類とにている。まだ擬音語というような特定の語彙のなかった時代、説明に苦心した様がうかがわれる。

語義については、

740……此等の内。濁れること葉はいやしう聞え。すめるはやさしう

おぼえ侍るなり。

とある。濁音を軽視するのは日本の古来からの通弊で、貞室も亦まぬかれえなかった。

言語を形成する音声の源をたずね、その分類が論ぜられる（たとえば鈴木朗―1764―1837―雅語音声考）のは、之よりなお二五〇年も後の事である。

ハ、「かたこと」にみる擬音語の総数

684「ひったり」以下、740「かんごり」にいたるまで、

右五六十のこと葉は大かた音響をもて。頓（やがて）而唱ふる敷。

と、一連に57カ条にわたり擬音語を列挙したが、之は意識しての擬音語収集であることは、それらの条々にかぎり、従来の　正語―かたこと―批判　の常型をさけて　擬音語―その解説又は意見陳述という別型をとっているのをみても明白である。なお「かたこと」には、上記の外にも、文中に自然に使用された擬音語もかなりおおい。今、そのすべてをあげてみる。

13きら〳〵し　さら〳〵と

21かど〳〵し

36けんざり　あんざり

40にこと

51ひったり

59しとゝ　しほ〳〵　じぼ〳〵　じっぽり　しょぼ〳〵　しっぽり　しょぼくさ

62（ひなた）ぶくり　（ひなた）ぼこり

92ひしと　ひっしと

96巍ゝ堂ゝ

97巍ゝ堂ゝ

126どしやくしや

210岸破（かっぱ）と　がはと

244むたくた

656ぬんまり　ぬまり

658ひる〈放る・嘘る〉

659つんまり

660ちんまり　ちょっぽり　ちっぽり　ちょぼ〳〵　ちょっこり

ちんぼり　ちぼ〳〵　ちょこ〳〵

安原貞室著「かたこと」をよむ（下）　―擬音語、俚諺について―

661 ちよん　すか　つん　ずん　すつかり　すか　すか〳〵
　すか〳〵　ずか〳〵　ずかずつか
662 ふつ　ふつつ　ずんぶ　ずぶ　ふつ　ふつつ
664 さつぱ　ざつぱ　しやつぱ
665 しやつぱり　じつぱり　しいわり　しつぱり　さは〳〵
　しやつぱり
666 しはむ　しはる
667 ひら〳〵　びら〳〵　ひらり〳〵　べら〳〵　へら〳〵
　めら〳〵　ひら〳〵　びら〳〵　ひらり〳〵　べら〳〵
　へら〳〵　めら〳〵　めら〳〵
670 しく〳〵　しくほく
679 ぬんめり
684 ひつたり
685 びつたり
686 しとゝ
687 しと〳〵　じと〳〵　じと〳〵　しく〳〵　しくほく
688 へつたり　ひら〳〵
689 べつたり
690 ぼつたり
691 ほつたり
692 ほた〳〵
693 こつとり
694 ごつとり　ごつとり
695 がつたり
696 がた〳〵
697 かた〳〵
698 しつとり
699 につこり
700 わんごり
701 くつさり
702 ぐつさり
703 つべかし　つべ〳〵　つべかは
704 ぞんべり　ぞべ〳〵
705 もシ〳〵
706 ぐつちやり
707 しつかり
708 しか〳〵
709 しかほか
710 ほつこり
711 ぼつこり
712 ほや〳〵　やは〳〵
713 ほつと
714 ほつちり　ほつち
715 ほつしり
716 ほし〳〵
717 つく〳〵
718 つゝくり
719 ぼつとり

720ぼじゃ〳〵　なよ〳〵
721くつと　ごつと
722こと〳〵
723ごと〳〵
724くはったり
725ぐはったり
726じゃ〳〵
727どや〳〵
728どしやくしや　とやくや
729ずつしり
730でつくり　どつしり
731ひつしやり
732びつしやり
733がんじり
734かつしり
735かつさり
736がつさり
737くんじり
738びちよ〳〵
739ひちよ〳〵
740かんごり
743ぶらり
800（雪）こう〳〵　さと　青〳〵　まざ〳〵　ねう〳〵
ちら〳〵

備考

1できるだけ語幹でしめした。

2ひる（658）しはむ、しはる（666）は、著者は擬音語とみるが、疑問である。

3巍ゝ堂ゝ（96・97）は漢語。青〳〵（800）は漢語の形で、字音よみだが、顔色の「青い」のをいう和語的用法。岸破（210）は宛字。

4――印は再出語

5═══印は三出語

合計158語。（うち再出語20、三出語2）

ニ、「かたこと」にでる擬音語（語幹のみ）を、語構成より分類すると、

（計算は―総数158語のうち、再出語・三出語は一語のみをとる。又「658ひる」、「666しはむ、しはる」は、「658…鳴侍る音にや」「666…音をこと葉に用ひたるものにや」という貞室の提案ながら、擬音語とするのは疑問なので省略して、残る132語を対象とした。）

1品詞　形　二
　　副一三〇
　　計　一三二

2構成型　単一型　八三
　　複合型
　　反復型　四五

組合せ型　四

計　一三二

3音節数

一音節　一
二〃　一四
三〃　一二
四〃　一〇二
五〃　一
六〃　二

計　一三二

擬音語は貞室の後も、短句で世情を諷した川柳に流行し、現代はフィーリングでよむ漫画に氾濫している。一方、「現代文学とオノマトペ」（―小嶋孝三郎）、擬音語・擬態語辞典（―天沼寧）などの研究書もでている。一般にいわれるように、

型　反復型がおおい。

音声面　母音ではア列音がおおく、エ列音はすくない。

同母音の組合せがおおい。

子音ではラ行音がおおい（特に語中・語尾）

促・撥音がおおい。

音節数　四音節語が断然おおい。

などの擬音語に関する原則は、「かたこと」の158語にも通じている。

二、「かたこと」の俚諺

イ、はじめに

昨50年9月、文部省があたらしくだした校高古典（古文）の学習指導に、

「古典」とは、人が踏み行うべき道の規範を示した古い書物。…文献に現われた最初は「太平記」と思われるが、その巻二に

サレバ古典ニモ、君視レ臣如ニ土芥一則臣視レ君如ニ寇讐一トイヘリ

とあるように、古典とは、当時、人の道の規範を示す古い書物の意に用いられたものと思われる。（7ペ）

とある。

日本で現存最古の格言辞典といわれる源為憲（?―1011）の世俗諺文（寛弘四年―1007年―編、三巻）は、経籍、仏典より常語631章を抜萃したもの（―今は上巻のみ、224章―）であるが、之を世人に規範としてしめしたのであろう。

日本人は古来、諺のすきな国民のようであるが、その諺も、聖者君子の片言隻句が規範の意をもって引用されると金言、格言であり之に反し、普通の俗語、世話ことばが、たまたま世人の共感をえてひろまる時、それは俚言、世話といわれる。下学集にいう、

世話　風俗之郷談也

諺　同世話之義（態芸門）

俚言は金言ほどの権威はないが、半面の真理をしめす教訓として、ふるくから用例あり。たとえば

。記上に天若日子に使した雉の事を記して、

其雉不レ還。故於レ今諺曰ニ雉之頓使一本是也。

。万葉、枕、土佐日記の諺は「諺の研究」にみえる。

死し子顔よかりき（土佐日記、二月四日ノ条）

飯粒(いひぼ)してモツ釣る（〃　二月八日ノ条）など。

ロ、俚諺収集の略史

1北条氏直（武将、徳川家康の女婿）の諺留

俚言集覧に引く。東大図書館にあった原本は震災で焼失したが、たまたま藤井紫影氏がうつしておかれたのが、その著「諺の研究」の附録にのっている。「火と下人は身ニそふかたき」以下総数一〇一条。

2金句集

平語、イソップと共に三部集として刊行されたきりしたん本。ローマ字表記で金句二八二則を収録する。文禄二年（1593）刊だが禁教により徳川期には国人の目にふれる事はなかった。

3毛吹草巻二「世話付古語」

松江維舟著の俳諧書。七巻。正保二年（1645）刊。巻二の「世話付古語」に、

思ひうちにあればいろそとにあらはる

以下諺七〇四章と、「地ごく耳」など比喩的短句一〇〇語を収録している。目的は俳諧の資料としてであるが、意識しての諺収集では先駆をなすものとおもわれる。和語がおおいが、漢籍仏典に由来するものもある。

4、貞室の「かたこと」

貞室の著は、毛吹草刊行におくれること五年にして慶安三年（1650）にでる。「かたこと」にとりあげた金言、俚諺については後述する。

5世話燒草五巻

「かたこと」刊行から更に六年おくれて、釈皆虚編の世話燒草五巻が、明暦二年（1656）に刊行された。同じく俳諧の書で、巻二に「11曳言(ひきごと)之話」として諺七七三章をおさめる。一名を「世話盡」といわれるように、諺収集の大成である。

ハ、「かたこと」にひく金言、俚諺について

貞室は俳諧人ではあるが、その著「かたこと」は書名のとおり片言をとりあげた「言葉の書」で、俳諧をあつかった書ではない。したがって諺のとりあつかい方も前記諸書のものとはおのずからことなり、少数の金言はともかく、意識してとりあげた場合の俚諺の方は、かたことに類するもの、著者の言をかりれば「いはずしてもこと欠侍るまじとおもふこと葉」のみを対象としている。

(1)金言

文中に自然に引用された金言が、「かたこと」には十章余ある。列挙すると、（―は毛吹草にもでているもの）

表①

序　君子名之必可言也言之必可行也君子於其言無所苟而已（論語子路篇）

2　如在（論語八佾篇）

13　蛇は一寸よりそのかたちをしり。人は一言にてその心ざしのはからるる

45　積善家在ニ余慶一（易経文言）

75　金言耳に逆ふ
　中言耳にさかふ（孔子家語）
　良薬口ににがし（孔子家語）
83　賤服二貴服一謂二於之僭上一僭上無礼国凶賊也
87　造次顚沛（論語里仁篇）
228　東坡文集曰。真生レ行々生レ草真如レ立行如レ行草如レ走未レ有下未二能立能行一而能走上也

以上は漢籍に本づくとおもわれるものであるが、

39　無明無体全依法性。法性無体全依無明
40　釈尊一枝の花を拈じたまひて……（聯灯会要釈迦牟尼仏章）

など仏典に本づくとみられるものもある。

(2)俚諺

13一　いはずしてもこと欠侍るまじとおもふこと葉こそ。よにおほき物なれ。
　犬の蚤で嚙当た
　煎菽のえりぐひ
　阿弥陀は銭ほど光る
　などやうのいやしく拙きこと葉は。夢にもいふまじきにや。

といましめ、

　……猶此おくに至りて。いやしとおもふこと葉をしるし侍るべし

といい、その言のごとく、巻五において、

　いはずしてもことかき侍るまじきこと葉

の項をおいて、

755一　雁は八百矢は三文。……
…　（計35条）
789一　膝とも談合
　右三十ケ条余のこと葉を仮にもいふことなかれ。

と厳戒する。しかも筆はなおのびて、

790一　蚤の息さへ天にあがる……
…　（計8条）
797一　すつぺの皮……

が追加される。

結局、「かたこと」がとりあげた「いわずもがなのこと葉」は、

13条に3句
755－789条に35句　（うち、重複するもの1句）
790－797条に8句

の合計45句である。著者は789条のつづきで、

　かやうのいやしきこと葉は。世話にも五六十に過べからず。

といっているから、五六十のうち、45句をあげ、ほとんど網羅したつもりであろう。かくてこの種の「拙きこと葉」も数がこの程度のものなら、

　それをたしなみていふまじきは。いとやすきこと成べし。……あいかまへて〳〵つゝしみていふことなかれ。これをわきまふまじきは歎かしきこと

といましめむすぶのである。

　貞室が意識してとりあげた「いわずもがなのこと葉」、いやしい俚諺は以上のべたとおりであるが、先の金言とおなじく、自然に文

中に使用された俚諺も、右の外にいくつかある。

52いそがばまはれ勢多の長橋

165いへばいはるゝ物

293我仏隣の宝聟鼻　天下のうはさ人のよしあし

650手がいればあしもいる　など。

(3)「かたこと」の俚諺と毛吹草の俚諺との関連

毛吹草は先述のごとく、俚諺七〇四章、比喩的短句一〇〇語をおさめる。「かたこと」にでる金言は、漢籍に本づくもの八章のうち、四章が毛吹草と一致する。（153頁表①参照）

次に「かたこと」が「言わずもがなのこと葉」としてあげた俚諺45句をみると、また毛吹草の句と一致するものが意外におおい。

表②　毛吹草　「かたこと」

こぼれさいはひ　763

くさりても鯛　764

三寸の見なをし　767

はむも一ごゑびも一ご　768

ほさつみがいればうつふく　769

人間みがいればあをのく

むかしのゐんくわは皿のはたまはる　770

いまのゐんくわははりのさきまはる

すすめ百までおどりわすれぬ　761

廿五のほさつもそれ〳〵のやく　771

にんにくむきたることし　772

こまたとられてもかつがほん　773

しうとめのばふさがり

としよりおやとぢぶつだうはおき所なし　787

ひろきいへはさやなり　788

てうあひかうじてあまになす　774

じゆんのこぶしにもはづるな　792

すつぺのかはともおもはず　796

ほをひらふてめうにまいらする　797

せけんははりもの　775

思案のあんのじが百くはんする　776

さらにももる　777

百日に百はいはもれと一日にはもられず　778

がんは八百矢は三もん　779

ちやわんをなげばわたでかゝへよ　755

やすきものはぜにうしなひ　780

ほとけのまねはすれど長者のまねはならす　781

あるそではふれとないそてはふられす　785

へや住三年は山ふしのみねいり　782

人ごといはゞ薤しけ　786

膝ともだんかう　794

むかしの剣はいまのなかたな　789

791

右は毛吹草を本として、「かたこと」の句と一致するものを順に列挙したのだが、計30句にのぼる。「かたこと」にあげる45句のうち

三分の二が毛吹草と一致するのである。

「かたこと」の文中に、自然に使用されている俚諺にも先にふれる所があったが、それらも亦毛吹草の句と一致、又は近似するものがおおい。

表⑧

毛吹草	「かたこと」
いそがばまはれ	52条の和歌
手がいればあしも入	650条
へんてつもなき	49条
となりの宝をかぞふるごとし	293条の和歌と類似
狼に衣きせたるごとし	13…唯獣によき絹をきせて…

毛吹草は俚諺704章に、比喩的短句100語をくわえた大集団である。同時代に俚諺をあつかうとしたら、ある程度一致するのはやむをえぬ事とおもわれる。しかし「かたこと」の俚諺をみるとその一致度がいちじるしい。金言（表①）や一般の俚諺（表⑧）はとも角としても、「いわずもがなのこと葉」45句のうち、一致する30句（表②）をよくみると、「かたこと」にあげた順序も、毛吹草にかかれた順序とほぼ一致する事が前掲の表でわかる。貞室は五年前にでた先輩維舟の俳諧書毛吹草に勿論目をとおしていたに相違ないが、「かたこと」の巻五、「いはでもこと欠侍るまじきこと葉」43句をあげるにあたっては、毛吹草も手近かな参考書の一つとしたのであろう。

(4)維舟と貞室との関係

維舟こと松江重頼は一代の論客で著書もおおく、門下に言水や鬼貫らをもつ貞徳門の長老である。同門の長老野々口立圃と犬子集論争により、師貞徳から両人とも破門されたが、俳諧活動はおとろえず、その後貞徳の跡をついで花の本二世を称した貞室との間にも論争がある。貞室からみれば、維舟は兄弟子、先輩ながら、同時におそるべきライバルでもあった。にもかかわらず、俚諺の採取について、前記のごとく関連がふかいのは何か。

けだし俚諺は同一社会、同一世代の共感をえたものでなくては通用せぬ。簡単に個人が創作できるものでもない。数にも使用句にもおのずと制限がともなう。毛吹草がすでに八百余の俚諺、短句の大集団であれば、之と共通する面のおおい事はやむをえなかった。

俗語の研究と活用に文学のあたらしい活路をもとめた俳諧として当時ようやく世人の間に流行のきざしをみせた俚諺を、資料としてとりあげる価値はおおきい。そこで貞室も、毛吹草の句と一致することのおおいのを承知の上で俚諺をとりあげたが、ただし之を単に処世の教訓的な役割とはせず、著書の性格にあわせて、かたこと矯正の教材に使用した。かくて「いはずともこと欠侍るまじきこと葉」五六十を列挙し、之らのことばはいやしく、つたなしとして、

あいかまへて〳〵つゝしみていふことなかれ。

とつよくいましめたのである。彼は「かたこと」の題材として俚諺を活用したが、また俚諺の質の向上を意図した者ともうけとれる。

（51・9・3・稿）